

●第5回野外見学採集会報告●

川 澤 啓 三

今年にはいって最初の見学会として、2月2日(日)午前10時、八天大橋東詰めの川原で開かれた。なお、この橋の名前は、伊野町八田(ハタ)と土佐市天崎(アマザキ)を結ぶことに由来する。あいにくと気圧の谷の通過で、天気予報では午前中はなんともちそうということであったが、ポツリポツリとしだして気をもませる。竹島洋文さん(追手前高教)のかけ声で、円陣を組んで開会、初めての参加の方も居られるので、会長よりこの会の目的やら事業を簡単に話して、今日の本題に移る。

まず、川原の石の見方・調べ方について、吉倉紳一先生(高知大・理)からお話を伺う。川原の石は、流域の地質を反映しているので、1/20万高知営林局管内表層地質図(1977年刊)上に仁淀川の流路を書き込んだ透明シートをのせて、上流地域よりどのような地質が分布しているかをお聞きする。特に興味をひいたのは、仁淀川の水源地域である。石鎚山付近の地質である。ここは三波川帯の広域

変成岩である結晶片岩を貫いて 1.4×10^7 年前のマグマの活動によって各種の深成岩類やそれをおおうような安山岩質の溶結凝灰岩が分布している。面河川に刻まれた各種の酸性貫入岩は、仁淀川の川原の石に細粒から粗粒～斑状の、また花崗岩から花崗閃緑岩に至るバラエティに富む礫状となった基質部とは混じりあわないで冷却固結した、おそらく別の分化したマグマと接触したと推定されるような表面構造をもった礫も見られた。そこにはまた、マグマの上昇貫入時にとりこんできた結晶片岩の岩片にも同時に見られた。

このように川原の石の表面をよく観察すると、また別の角度から地球の生き立ちを読み取れるようで面白いと思う。

国道R-33線上の御三戸（ミトド）から池川にかけて東－西方向の谷が発達するが、これは構造谷で、これより南側は、御荷鉾（ミカブ）緑色岩類をはさんで秩父（チチブ）地帯である。この谷に入岩があって、一部には細粒花崗（俗称で土佐の虎石）となって、目にふれる機会も多い。

秩父地帯には、チャート（これは石英からできている大変硬い岩石で、色は赤・緑・灰・黒など多様である。放散虫という原生動物の化石を含むことが多い）・玄武岩・凝灰岩・石灰岩・砂岩・泥岩・礫岩など多種類の堆積岩類からできているので、これらの岩石が供給源となっていていろいろな礫が見られるが、組成の差が硬さの違いとなってあらわれ、川原の石としてチャートや玄武岩・砂岩などが多く目にとまり、これらに加えて先にのべた酸性貫入岩類や溶結凝灰岩などが多かったように思う。

わずかな時間の見学会であったが、郷土の川をより理解するためにも「川原の石の学習図鑑－仁淀川の巻」のようなものを作りたいネ……とは参加者一同の気持ちではなかったかの思いましたが、みなさんはどうでしょうか。

参加者30名 12時解散

